

# 記者の目



三輪 晴美  
生活報道部

がんの治療に関する情報があふれている。中には、最新の医学とはかけ離れた治療法を勧めるものも多い。私は乳がんを患い、当事者の視点も含めてくらしナビ面で昨夏から「がんステーション4を生きる」、「がん社会はどこへ」の連載取材に携わってきた。現代医学の恩恵を受けている者として、日本人の2人に1人ががんにかかることされる今、患者が安心して治療を受けられる社会を実現させたい。そのためにも、誤った情報発信は断じて許されない。

## 放置のすすめ 上がる反論の声

近年、注目を集めるのが元慶応大医学部講師・近藤誠氏の著書だ。近藤氏は「がんは放置すべし」などと、現在のがん医療の根幹を否定する。2012年、文化的業績に対して贈られる「菊池寛賞」を

## 「がん治療法巡る論争」

受賞、同年出版の「医者に殺されない47の心得」は100万部を突破した。

しかし現場の医師からは「本を読んでがんを放置した結果、病を悪化させる患者がいる」「救える命も救えなくなる」などの声上がり、今年、近藤氏の主張に異を唱える本が相次ぎ出版された。

私は08年末、進行度が最も高い「ステーション4」の乳がん

と診断された。腫瘍は8センチ以上と異様な大きさで、リンパ節転移多数、さらに骨転移は広範囲で胸膜転移も疑われた。寝返りも打てず、医師は「頭の骨も溶けかけている」と指摘。手術不能で、抗がん剤と、がんの増殖などに関わる特定の分子のみを攻撃する分子標的薬の一つ「ハーセプチン」による治療が始まった。

初回の投薬で、がん進行の指標となる腫瘍マーカーの高値は半減し、1年後に職場復帰。その頃には画像上、胸とリンパ節から腫瘍が消えた。以後、骨に腫瘍は残るが以前と同じ生活を続けている。

そんな私が、近藤氏の著書の「ハーセプチンは認可を取り消されるべきだ」という一節に仰天したのは言うまでもない。ハーセプチンは転移増殖しやすいタイプの患者に有効で、乳がん治療の成績を飛躍的に向上させたことされる。先日、近藤氏に取材して話を聞いた。私の症例を話したが、近藤氏は「分子標的薬も効かない」と言う。「医師と製薬会社と厚生労働省が利権を守る世界があり、治験新薬承認のための臨床試験」のデータはごまかして改ざんされている。治験の論文の筆者に製薬会社の社員が名を連ねること自体がおかしい。さらに「抗がん剤は毒でしかない」と強調した。

がん剤は健康な細胞も攻撃するため、副作用がある。「過剰な投与が命を縮める」との主張では、多くの医師も近藤氏に同意する。だからといって、近藤氏の全否定は放置できない。

「抗がん剤が「効く」とは、血液がんなどを除けば「治癒」ではなく、腫瘍が一時、縮小することを意味する。効果に個人差が大きく、投与の都度「リスク」（危険）と「ベネフィット」（利益）をはかりにかけ、患者の価値観、人生観と照らし合わせて治療を進めるべきだとされる。実際、「副作用はあっても、それに見合う効果が実感できるので治療を続ける」という患者は多い。まれに副作用死はあっても、治療法が進んだ今は抗がん剤で恩恵を受ける患者が多いのではないかと。

そう聞くと、近藤氏は「中には延命する人もいるだろう。しかし自分が知る多くは、転移もないのに再発予防で抗がん剤治療を始めたら、副作用で亡くなったといった話ばかりだ」と語気を強めた。

「抗がん剤は毒でしかない」と強調した。確かに、抗がん剤は健康な細胞も攻撃するため、副作用がある。「過剰な投与が命を縮める」との主張では、多くの医師も近藤氏に同意する。だからといって、近藤氏の全否定は放置できない。

「抗がん剤については、一般の人の間でも負のイメージが強い。医療不信もあいまって、「医師は不都合な真実を隠している」とばかりにネットでデマが流れ続ける。

「製薬会社の政治力は否定できない。でも、そこまでわかりやすい情報操作は不可能で、透明性も進んでいる」と話すのは、医師で医療問題を研究する東京大医科学研究所の上昌広特任教授だ。ただし「抗がん剤が効かない人や適正な医療を受けられない人は近藤氏の本に救いを見いだす」と指摘する。「抗がん剤を正しく評価するには、国民一人一人が賢くならなければ」

「抗がん剤が効かない人や適正な医療を受けられない人は近藤氏の本に救いを見いだす」と指摘する。「抗がん剤を正しく評価するには、国民一人一人が賢くならなければ」

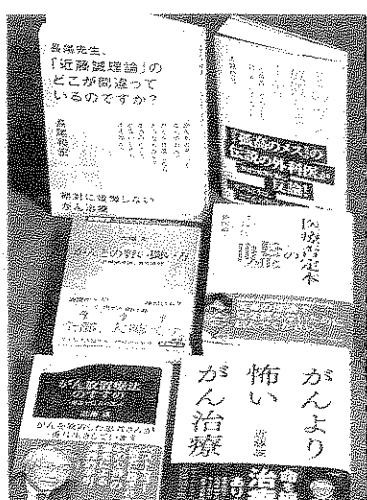
「抗がん剤が効かない人や適正な医療を受けられない人は近藤氏の本に救いを見いだす」と指摘する。「抗がん剤を正しく評価するには、国民一人一人が賢くならなければ」

「個別化治療」も進み、不必要な抗がん剤治療は避けられるようにもなってきた。医学は一步一步、進んでいる。がんになっても人生は一度きりだ。あふれかえる情報に惑わされず、信頼できる医師のもと、自らの命と悔いなく向き合っていく。その一助になる情報を今後も発信していきたい。

「個別化治療」も進み、不必要な抗がん剤治療は避けられるようにもなってきた。医学は一步一步、進んでいる。がんになっても人生は一度きりだ。あふれかえる情報に惑わされず、信頼できる医師のもと、自らの命と悔いなく向き合っていく。その一助になる情報を今後も発信していきたい。

「個別化治療」も進み、不必要な抗がん剤治療は避けられるようにもなってきた。医学は一步一步、進んでいる。がんになっても人生は一度きりだ。あふれかえる情報に惑わされず、信頼できる医師のもと、自らの命と悔いなく向き合っていく。その一助になる情報を今後も発信していきたい。

# 誤った発信 許されない



がん治療に関する医師による書籍。さまざまな主張がある。